

太宰文学からみた性的虐待と心傷

矢野尊義*
yano@sejong.ac.kr

<目次>

- | | |
|----------|------------|
| 1. 序論 | 4. 性的虐待と心傷 |
| 2. トキと初代 | 5. 結論 |
| 3. 無垢の凌辱 | |

主題語: 無垢(pureness)、性的虐待(sexual ill-treatment)、凌辱(trample)、心的外傷(trauma)、汚れ(dirt)

1. 序論

今まで多くの研究者が太宰の母性愛体験の欠如と母性愛渴望を指摘し、彼の母性愛コンプレックスが彼の人格と女性関係に大きな影響を及ぼしていると述べている。奥野健男が「彼は自ら意志して自己破壊を企てた」¹⁾と、佐々木啓一が「女性をめぐる(太宰が)繰り返す愚行と自殺の種々相は、自己破壊への道程であった」²⁾と言うように太宰の心の中には何らかの深い傷痕が存在し、それが常に彼を自己破壊的行動に駆り立てるものと思われるが、それが何であるかということを究明することは時代を問わず太宰文学研究の重要な課題であると思われる。

梶木剛は太宰に「本質的にあるのは幼年期における母親からの疎外感なのである」と言い、鳥居邦郎は「父母に愛されない(太宰は)父母とは遠く離れて育った。特に叔母とだけが去ってからは、一人で投げ出されて生きて来た」と言った。³⁾ また佐々木啓一は「母の愛の本質を求めた苦悩の生涯、『母胎復帰欲』という一種の衝動とみる」⁴⁾と、大野裕は「彼

* 世宗大学 日語日文学科 助教授

1) 奥野健男「太宰治論」文学批評の会(編)(1972)『批評と研究 太宰治』芳賀書房, p.17

2) 佐々木啓一「太宰治試論」日本文学研究資料刊行会(編)(1970)『太宰治』有精堂, p.40

3) 梶木剛「太宰治の基調」『一冊の講座』編集部(1983)『太宰治』有精堂, p.8, 鳥居邦郎「『晩年』」上掲書, p.56

4) 佐々木啓一「太宰治試論」日本文学研究資料刊行会(1970) 前掲書, p.41

が幼小児期に繰り返し味わった母なるものの喪失体験が、その後の彼のパーソナリティ発達に強い影響をおよぼしている」⁵⁾と言った。また懸田克躬は「彼が『母なるもの』に対して深い愛着と同時に反感とをいただいている」⁶⁾と言い、西田正好は「彼もまた自然母の愛を身近に知る機会には恵まれなかった。このみじめな渴愛体験はやがて太宰の生涯を貫く強烈な母性思慕と化し、後年の彼の複雑な女性関係の心理的背景を構成した」⁷⁾と言った。このように精神医学や心理学的の先行研究ではみな太宰の母性愛体験の欠如とそれから生じる心理的問題を指摘している。

畑下一男は「初恋の人みよのなかに、叔母のイメージを求めて魅かれていた様子さえうかがえる。母によって満たされなかった母性愛への渴望が代償として叔母の愛によって補われていた。太宰治はみよに叔母のイマゴ(Imago)を見ていたことになる。ということは太宰治の母性像は叔母だったということである」⁸⁾と述べ、みよは叔母のイマゴ(Imago)であり、太宰は母親の代償としての叔母の愛を求めてみよに接していたとした。また精神分析医である植村浩は「太宰の初代に対する愛情は、母に対する欲求不満の結果生じた母親固着のためである。心理的には初代は太宰にとって、母あるいは女性一般に求めて得られなかった理想像であり、彼女を芸妓から救い、彼女と結婚するということは母親救済を意味し、幼年期のコンプレックスと深く結びついている。そうでないと初代への異常な執着は理解できない」⁹⁾と結論づけている。畑下や植村は、母性愛体験の欠如の問題がさらに太宰の初恋の相手である少女との関係や太宰の妻である初代との関係にまで及んだものと見ている。植村浩はまた一方で『『思ひ出』の『…私はその夜、みよと結婚するについて、必ずさけられないうちの人たちとの論争を思ひ、…』(という)この心理はおそらく小山初代との結婚へつき進む太宰の心理を映している」¹⁰⁾と述べた。ここで植村浩は、作品の中のみよと現実の初代の関係について示唆しているが、具体的な内容については明らかにしていない。

塚越和夫は「(太宰と初代の)二人の関係はもっと解明されなければならぬ。それには小山

5) 大野裕「精神分析学からみた太宰治<母なるもの>への復讐」山内祥史(編)(1994)『太宰治論集 作家論 第8巻』ゆまに書房, p.293

6) 懸田克躬「破滅型作家の精神病理」山口祥史(編)(1994)『太宰治論集 作家論 第2巻』ゆまに書房, p.161

7) 西田正好「太宰治の深層心理学的診断」山口祥史(1994) 前掲書(第2巻), p.322

8) 畑下一男「作家論からの臨床診断 太宰治」(山内祥史(編)(1994)『太宰治論集 作家論 第5巻』ゆまに書房, p.297, p.309)

9) 植村浩「太宰治論(一) 精神分析医ノート」山口祥史(編)(1994)『太宰治論集 作家論 第2巻』ゆまに書房, p.304. 塚越和夫も「初代は太宰文学が確立されたのち登場した女性群とは比較にならぬ重みをもって太宰文学にのしかかっていた。果して小山初代とは太宰にとって何であったのか」と疑問視している。(文学批評の会(編)(1972)『批評と研究 太宰治』芳賀書房, pp.346-347)

10) 植村浩「太宰治論(一) 精神分析医ノート」山口祥史(1994) 前掲書(第2巻), pp.303-304

初代に関する伝記的調査とともに、作品そのものからのアプローチが必要であろう¹¹⁾と述べているが、小説が虚構であるとは言え、作品が作者の心象を表わしていることは事実である。渡辺芳紀は「太宰は単純な私小説家ではない。体験を大幅にデフォルメして、作品を作り上げていったのである。が、体験が作品の大きな根底となっていたこともまったく否定できない¹²⁾と述べているが、作品は作者の体験と無関係ではなからうし、作品に書かれた虚構世界には必ず作者の深層心理が現われているはずである。

本稿では、今まで先行研究で解明できなかった太宰の「初代への異常な執着」に対して太宰の心の深層世界において初代がどういう存在であったのかという観点から明らかにする。すなわち『思ひ出』のみよや『無間奈落』のおさだ、そして『人間失格』のヨシ子と初代との関係について作品を比較しながら明らかにした後で初代が太宰の少年期における性的虐待に対する心的外傷とどのように関連しているのかを明らかにする。

2. トキと初代

『思ひ出』のみよのモデルが当時太宰家の女中であった宮越トキであることはすでに定説になっており、太宰の初恋の相手が彼女であったということも事実として知られている。13)『思ひ出』には、みよに対する主人公の淡い思いが描かれている。しかし『思ひ出』は「私」の心理を回想することが主眼となっており、みよに対する描写はごくわずかである。

そのころから私はみよを意識しました。赤い糸と言へば、みよのすがたが胸に浮んだ。(中略)
(弟は)けっこんするのか、と言ひにくさうにして尋ねた。私はなぜだかぎよつとした。出来るかどうか、とわざとしをれて答へた。弟は、恐らく出来ないのではないか、といふ意味のことを案外なおとなびた口調でまはりくどく言つた。それを聞いて、私は自分のほんたうの態度を

11) 塚越和夫「太宰治-人と作品-」文学批評の会(1972) 前掲書, p.347

12) 渡辺芳紀「太宰治論」日本文学研究資料刊行会(編)(1985)『太宰治Ⅱ』有精堂, p.43

13) 「中学時代にかかれ(太宰)は津島家の女中に恋をしている。『思ひ出』の中に「みよ」と記された女性である」(塚越和夫「太宰治-人と作品-」文学批評の会(編)(1972)『批評と研究 太宰治』芳賀書房, p.346)「女中みよは、実在の女中宮越トキと対応する存在である」(土居寛之「現代小説における<私>の分析」山内祥史(編)(1994)『太宰治論集 作家論 第5巻』ゆまに書房, p.26)「このみよにはモデルがあって大正十四年の秋十四歳、行儀見習をかねて小間使いとして津島家に住みこみ、昭和二年一月実家に帰って行った宮越トキであるという」(水谷昭夫「太宰治の『愛する人』」山口祥史(1994) 前掲書(第8巻), pp.132-133)

はつきり見つけた。私はむつとして、たけりたつたのである。(中略)これからはもう、みよの決心したいであると思つた。しかし、機会はなかなか来なかつたのである。14) (思ひ出)

『思ひ出』には主人公のみよに対する「私」の恋心が美しく描かれている。

たつた二人きりになつて見ると、あまりの気づまりから殆ど不気嫌になつて了つた。私はその板の潜戸をさへわざとあけたままにしてゐたのだつた。(中略)私は満足してゐた。あれだけの思ひ出でもみよに植ゑつけてやつたのは私として精いっぱいのことである、と思つた。みよはもう私のものにきまつた、と安心した。(思ひ出:47-48)

このように主人公は、この時すでに女中みよとの結婚を決心していたのである。15) しかし、中学三年の時、故郷に戻つた彼は意外な事実を知ることになる。

いよいよ共にふるさとの家へ帰つて来て、私たちは先づ台所の石の戸ばたに向ひあつてあぐらをかいて、それからきよろきよろとうちの中を見わたしたのである。みよがゐないのであつた。(中略)みよは、ある下男にたつたいちど汚されたのを、ほかの女中たちに知られて、私のうちにゐたままなくなつたのだつた。男は、他にもいろいろな悪いことをした。(思ひ出:48)

ここではつきり書かれていることは、下女であつたみよが他の下男に犯されたこととそれが原因で彼女が「私」のうちを出たことである。渡部芳紀は「相馬氏によれば、みよがそういうかたちで去っていくのは虚構だということで、なぜ、そのように虚構化したのかを考える必要がある」16)とっており、土居寛之も「トキ女の回想によると太宰から東京出奔をそそのかされたが、太宰は主人であり、身分の違いが怖ろしかったから実家に帰ってしまったということである」17)と述べており、あたかも当時下女トキが太宰家を出た理由は作品の内容と異なるかのように語っている。しかし、『思ひ出』におけるみよの凌辱と同じことが『無間奈落』にも書かれている。『無間奈落』にはまずトキを描いたと思われる女中おさだの様子が詳細に描かれている。

14) 太宰治(1989)『太宰治全集 第一巻』筑摩書房, pp.38-43 以下『思ひ出』の引用は本書による。()の中の数字はページ数である。

15) 『『思ひ出』は誰の眼にも明らかな自伝的作品である』(鳥居邦郎『『晩年』』『一冊の講座』編集部(1983) 前掲書, p.55)

16) 渡辺芳紀「太宰治-作家の性意識-」山内祥史(1994) 前掲書(第5巻), p.300

17) 土居寛之「現代小説における<私>の分析」山内祥史(1994) 前掲書(第5巻), p.26

それはつい十日程前乾治の家に奉公に上つた、両親も兄弟も無く、たった一人の肉親である伯父の世話に今迄なつて居たおさだといふ、二十歳位の女中であつた。(中略)(乾治は)始めて彼の好みの女の型を発見したのであつた。(中略)併しこの第二の女太夫は彼女の純真な無垢と、澁刺たる肉体の弾力とで、女太夫を悠々と凌いで居た。(中略)(乾治は)始終おさだの後にくつついて居た。(おさだは)毎日、父や母や祖母の身のまはりの小さい用事を勤める他は、針仕事ばかりをして居た。乾治は何時も其の仕事をしているおさだの傍に坐つては、何やかやと要らない世話を焼きたがつた。針に糸を通してやつたり、糸を糸巻にまいてやつたり、又時には(中略)菓子を分けて遣つたりした。18) (無間奈落)

このように『無間奈落』には主人公の家に新たに入ってきた女中おさだに主人公が少年ながらも始終働きかけ、彼女をいたわる様子が描かれている。主人公が彼女が気に入ったのは彼女の「澁刺たる肉体」と「純真な無垢」の為であつた。『思ひ出』には描かれなかつた少女の性格や容姿、そして主人公に対する少女の反応も『無間奈落』には余すことなく描かれている。

おさだは何時もつんと澄まして居た。乾治が女中部屋に遊びに行つて、風呂敷を被つて、変な踊りをやつても決して他の女中のやうにげらげら笑はなかつた。(中略)おさだはただ、実感の伴はない冷たそうな微笑を、他の女中のお附合ひに鳥渡漏すだけであつた。(中略)おさだ澄まして居る時には非常に冷淡な賢い線が顔に現はれるにも不拘、多くの世の女性がそうであるやうに彼女の笑顔もほんとうの子供らしい純真な無智を大胆に人々の前でさらけ出すものであつた。おさだはそんな工合に微笑んでから仇気ない口調ではっきり言った。「でも、御主人様ですもの。勿体ないわ。」 (無間奈落:144-146)

主人公の恋心に対しておさだは主人公に「微んでから仇気ない口調で『でも、御主人様ですもの。勿体ないわ。』』と言うだけであつた。当時の日本社会において主人の家の息子と女中の恋などといったものは想像することすらできなかつたからであろう。

彼女がこんな工合に愚図愚図している間に果して、彼女の一生を台なしにしてしまつた彼女にとつては、一大事件が突発した。(中略)おさだは御主人の部屋から呼び出しの鈴を頭の上でジェンジェン聞きながら、(中略)いそいそと御主人の部屋に急いだ。(中略)此頃になつて彼女はめつきり身体が衰弱して来て居た。(中略)彼女は又、皮肉にも妊娠して居た。(無間奈落:155-162)

18) 太宰治(1991)『太宰治全集 第十二巻』筑摩書房, pp.144-145 以下『無間奈落』の引用は本書による。()の中の数字はページ数である。

おさだに対する主人公の恋心をよそにおさだは主人公の父親に妾の如く扱われ妊娠した。それから彼女はこの家にいられなくなる。水谷昭夫はこの「作品はおさだが、(主人公の)父の欲情の犠牲になる物語であるが、ここで太宰の愛する女性のなかにある犯されるものが姿をあらわしてくることとなる。作品『思ひ出』のみよもそうである。少女はその無垢な度合に応じて危機にさらされ、少年はその思慕の切なる度合に応じて錯乱する」¹⁹⁾と言っている。一方、初代については当時まだ彼女が少女だった頃の様子が『東京八景』に次のように描かれている。

Hとは、私が高等学校へはいったとしの初秋に知り合って、それから三年間あそんだ。無心の芸妓である。(中略)肉体的の関係は、そのとき迄いちども無かった。 (東京八景)

トキは太宰が中学生だった時に会った少女であり、初代は太宰が高校生になった頃に会った少女であるが、トキも初代も同じく当時14,5歳であったと思われる。共に下女や芸妓という社会的に最下の身分にあるかわいそうな境遇の少女たちである。²¹⁾『東京八景』で「私」が「Hとは、三年間あそんだ。」とあるように青年となっていたにもかかわらず太宰は、あたかも中学時代にトキと遊んだように初代ともまるで子供のように純真に遊んだものと思われる。このことから太宰にとって初代はトキとの追憶を思い出させるような無邪気な存在であったと察することが可能である。

3. 無垢の凌辱

植村浩はまた「太宰が芸妓の小山初代との結婚に執着し、あれほどねばりぬいたのはもつと深い理由があった。彼は初代が芸妓だが無垢だと信じていた」²²⁾からだと述べた。太宰が初代の結婚前の処女性について書いたものに『東京八景』の中の次の文章がある。

私は二十四歳になっていた。(中略)或る日の事、同じ高等学校を出た経済学部の一学生から、

19) 水谷昭夫「太宰治の『愛する人』」山口祥史(1994) 前掲書(第8巻), p.132

20) 太宰治 外(1986)『昭和文学全集 第5巻』小学館, p.839 以下『東京八景』の引用は本書による。

21) 「初代もみよも自分が『救ってやること』ができなければ、他の人間によってうばわれてしまう女なのである。」(懸田克射「破滅型作家の精神病理」山口祥史(1994) 前掲書(第2巻), pp.160-161)

22) 植村浩「太宰治論(一) 精神分析医ノート」山口祥史(1994) 前掲書(第2巻), p.304

いやな話を聞かされた。煮え湯を飲むような気がした。まさか、と思った。知らせてくれた学生を、かえって憎んだ。(中略)私は、Hを信じられなくなったのである。その夜、とうとう吐き出させた。学生から聞かされた事は、すべて本当であった。もっと、ひどかった。(中略)こいつの為に生きていたのだ。私は女を、無垢のままに救ったとばかり思っていたのである。(中略)僕の所へ来る迄は守りとおす事が出来たのだと。(東京八景:841)

『東京八景』には偶然に友人からHの青森時代の行動を聞かされ、彼女が処女でなかったことを知り、「私」が衝撃を受けた内容が書かれているが、このことは『陰火』(1936)にもそれとなく書かれている。

おれは、いま、君をばつかしめる意図から小説を書かう。この小説の題材は、おれの恥さらしとなるかも知れぬ。けれども、決して君に憐憫の情を求めまい。君より高い立場に拠つて、人間のいつはりない苦悩といふものを君の横面にたたきつけてやらうと思ふのである。おれの妻は、おれとおなじくらの嘘つきであつた。ことしの秋のはじめ、おれは一篇の小説をしあげた。それはおれの家庭の仕合せを神に誇つた短篇である。おれは妻にもそれを読ませた。妻は、それをひくく音読してしまつてから、いいわ、と言つた。さうして、おれにだらしない動作をしかけた。おれは、どれほどのろまでも、かういふ妻のそぶりの蔭に、ただならぬ気がまへを見てとらざるを得なかつたのである。おれは、妻のそんな不安がどこからやつて来たのか、それを考へて三夜をついやした。おれの疑惑は、ひとつのくやしい事実にかたまつて行くのであつた。23)

(陰火)

『陰火』では妻に対する「疑惑」と「おれ」の推測には違いないが妻に関する「くやしい事実」がほのめかされている。一方、『東京八景』では「二十四歳の或る日」に「私」がHの過去を知つたとあるが、太宰が24歳になった1932年は太宰が『思ひ出』の執筆を始めた年でもある。『東京八景』に出てくる内容が事実を語つたものであるとしたら、太宰が24歳の時に受けた初代の過去に対する衝撃が『思ひ出』執筆の動機になっているとすることができる。24)

しかし不思議なことに『思ひ出』の中の思慕の相手であるみよは、初代のこととは思われない。みよとは、あくまでもトキのことである。このことは初代の過去に対する衝撃がト

23) 太宰治(1989) 前掲書(第一巻), pp.112-113

24) 「彼女が処女ではなかったことを知り、初代の上に投射した空想はむざんに碎かれた。太宰はまるでその空想の根源をこれまで自分のいっさいの行動の謎をとこうとでもするように幼年期の追想をはじめ。そして遺書のつもりで書かれたのが『思ひ出』であり」(植村浩「太宰治論(一)精神分析医ノート」山口祥史(1994) 前掲書(第2巻), p.305)

キとの思い出と関連していることを意味している。すなわち、トキが初代に投射されると解釈できるのである。太宰はトキのことが忘れられなくて同じような境遇にある初代を愛したが、初代の過去の事実はトキに対する衝撃の記憶を再び呼び覚ましたと解釈することができるのである。

みよは、ある下男にたつたいちど汚された

(思ひ出:48)

(おさだは)彼女の一生を台なしにしてしまった

(無間奈落:155)

上の兩作品の文章からもわかるように少年太宰にとっての衝撃とは、好きだった少女の純潔蹂躪だったと言える。初代の不純な過去の発覚を通して太宰は少女トキに対する衝撃の記憶を思い起こし、再び心を痛めたと見ることができる。このような純潔蹂躪の衝撃的事件については、太宰の最後の遺書と言われる『人間失格』にも生々しく描かれている。

おいおい声を放って泣きました。いくらでも、いくらでも泣けるのでした。(中略)「なんにも、しないからって言って、…」(中略)ヨシ子が汚されたという事よりも、ヨシ子の信頼が汚されたという事が、自分にとってそののち永く、生きておられないほどの苦悩の種になりました。(中略)一夜で、黄色い汚水に変ってしまいました。²⁵⁾ (人間失格)

渡部芳紀は「妻(初代)が姦通を犯すといった事件、この事件は『人間失格』では、妻ヨシ子が行商人の男に犯され、取りあげられもし²⁶⁾たと述べ、あたかもヨシ子は初代を描いたかのように捉えているが、女性の性が「汚された」ことに対するこの実感を伴った主人公の「苦悩」は、はたして太宰が入院中に起った初代の姦通事件後のものだったのだろうか。トキの事件以来のものではなかろうか。初代の場合、『東京八景』や『陰火』に見られるような不純なものであったが、『人間失格』の妻のそれは『思ひ出』や『無間奈落』の少女のそれと同じく「純真な」ものが犯され、汚されるという傷つきを表わしているからである。

その妻は、その所有している稀な美質に依って犯されたのです。しかも、その美質は、夫のかねてあこがれの、無垢の信頼心というたまらなく可憐なものなのでした。無垢の信頼心は、罪なりや。 (人間失格:127)

25) 太宰治(2001)『人間失格』角川書店, pp.125-126. 以下『人間失格』の引用は本書による。
()の中の数字はページ数である。

26) 渡辺芳紀「太宰治-作家の性意識-」山内祥史(1994) 前掲書(第5巻), p.304

この内容は、被害女性の「無垢」を訴えたものであり、それが主人公にとって「たまらなく可憐なもの」であったことが明かされている。女性はその無垢ゆえに犯されたことが述べられているが、これはトキのことを思って書かれたものと思われる。なぜなら『人間失格』の妻は『東京八景』や『陰火』で書かれた妻とは全く異なるからである。すなわち、初代については「こいつの為に生きていたのだ。私は女を、無垢のままに救ったとばかり思っていたのである」(東京八景:841)とか「人間のいつほりない苦悩といふものを君の横面にたたきつけてやろうと思ふのである。おれの妻は、おれとおなじくらゐの嘘つきであつた」(陰火:112)と書かれているのを見てもわかるように無垢な存在としての妻のことを言っているのではないからである。また太宰が最後の作品『人間失格』において初代が無垢だった頃を回想して書いたものとも思われぬ。なぜなら「すべて本当であった。もっと、ひどかった。」(東京八景:841)とあるように、初代は最初から無垢な女性ではなかったことがわかったからである。初代の場合、無垢が汚されたのではなくともとも無垢ではなかったのである。それに対して妻ヨシ子の「無垢の信頼心」とは、純真な処女性のことを言っており、それは『人間失格』のみならず『無間奈落』や『思ひ出』にも共通して描かれている。これは『東京八景』や『陰火』で書かれた女性と『無間奈落』や『思ひ出』、そして『人間失格』で書かれた女性のモデルが別の女性であることを意味している。次は『人間失格』の妻ヨシ子の処女性についてである。

煙草屋の十七、八の娘でした。ヨシちゃんと言ひ、色の白い、八重歯のある子でした。(中略)「してよ。」ちっとも悪びれず下唇を突き出すのです。(中略)しかし、ヨシちゃんの表情には、あきらかに誰にも汚されていない処女のほいがしていました。(中略)てんで疑おうとしないのです。(中略)ああ、よごれを知らぬヴァジニティは尊いものだ(中略)処女性の美しさとは、(中略)やはりこの世の中に生きて存るものだ²⁷⁾ (『人間失格』109-112)

「私」がヨシ子と結婚したのは、彼女が「誰にも汚されていない処女」だったからである。「私」は「処女性の美しさ」が現実に「この世の中に生きて存る」ことに感動してヨシ子と結婚したのである。一方、『無間奈落』のおさだは次の如く描かれている。

乾治はふとおさだが此頃、何時も何かよくよ心配ばかりして居るらしいのを思ひ出した。(中略)「お前、何か悪い事をしたのぢや無いかい」(中略)乾治は不躰けにもとうとう、こう口を出してしまつた。「えつ」と彼女は物音に驚き易い乾治が其の為に飛び上らうとした程強く叫んでか

27) 太宰治(2001) 前掲書, pp.109-112

ら、真底からがっかりしたやうに、次第に生気の無い変にぼんやりした顔になつて行つた。(中略)彼女の眼から暗闇の中でもキラと光つた小さな粒が漏れ出た(中略)彼女は、やがてシクシク啜り泣き始めた。(無間奈落:147)

このように太宰にとって「処女性」とは、疑うことを知らない「無垢の信頼心」のことである。しかし、それは無垢であるが故にその分だけ無知であり、純真であるだけ危険にさらされざるをえない。

日数の重なるままに、次第に周太郎に接近して見るに連れて、彼女の御主人に対する或る漠然とした懐しい思ひ出が、意地悪くも益々高ずるばかりであつた。彼女はいぢらしくも身悶えすれぱする程、御主人の男らしいお慕はしい御姿が彼女のふくよかな胸の中に深く喰ひ入つた。彼女は幾度が御暇を願はうと決心した。だが一方に於いて何かしら素晴らしい力が彼女の其の固い決心をも忽ち鈍らしてしまつた。(無間奈落:155)

純真な女中おさだは、奉公先の家の主人である周太郎に仕えているうちに主人に対するその尊敬心は、次第に思慕の感情へと高揚していった。貧しい家に生まれた彼女にとって県会議員たる主人公乾治の父はよほど偉い人に映つたのであろう。こうしておさだは乾治の父の言いなりになつたのである。

『思ひ出』が書かれたのは、初代の過去を知つた後であるが、『東京八景』が書かれたのは太宰が退院後、太宰の入院中に初代が過失を犯したことを知つた後である。²⁸⁾ トキに対する性の蹂躪は、初代の過去を知ることによって思い出され、そしてその心の痛みはその後、太宰が入院中に起つた初代の過失によって再び現実のものとして太宰に迫つて来たと言ふことができる。

4. 性的虐待と心傷

では、太宰にとって初代とは何だったのであろうか。太宰は初代を通してトキとの日々を回想していたのだろうか。²⁹⁾ 少年時代の初恋の喪失は、一生太宰の心をとらえて離れな

28) 「彼はある時期ごとに自分の過去を振り返る作品を書いているが幼年期をもっともまとまった形では『思ひ出』のなかで述べている」(植村浩「太宰治論(一) 精神分析医ノート」山口祥史(1994) 前掲書(第2巻), p.302)

かったと言える。トキはある日突然消えたのであり、しかもその理由は作品の内容から見る限り、純潔の蹂躪であった。性的にませていた太宰が、性の蹂躪の意味を知らなかったはずがない。太宰は少女との結婚まで考えていたと書いてある。それゆえ、もしそれが事実であるとすればトキの純潔の蹂躪は、少年太宰の心に大きな打撃を与えたことは間違いない。

もう十七歳にも成つて居た彼の心にもやはり悲しい淋しい思を起させずには置かなかつた。(中略)乾治は親の不義、不正を知つた子が、どんなにひどい精神的の痛手を負ふものか、これ迄幾度と無く小説で読んで知つて居た。(中略)彼の成長は其のやうな出来事を日常見て居るやうな環境のうちでなされなかつたとは誰が言ひ得やう。(無間奈落:124-129)

渡部芳紀は「太宰が自分の出生に疑問を抱くにいたつたのは、そうした叔母や母とのかかわりだけに原因があつたのではなく、その環境、とくに父の品行にも影響されている」³⁰⁾と言つた。『無間奈落』における父親がおさだを犯したという内容をそのまま信じて太宰の父親がトキを犯し、そのためトキが太宰家を出て行つたというふうに解釈するわけではないが、このような家の主による女中に対する不祥事は当時の日本社会では珍しいことではなかつたと言える。それゆえ、たとえその相手がトキでなかつたとしても太宰家の中で現実にあつた話であると思ふことが可能である。³¹⁾ 太宰のこういった心の訴えが何よりの証拠であると言つてよい。次は『無間奈落』における少年なる主人公に対する下男の性的いたずらの記憶である。

乾治は異様な好奇心にぶるぶる震へた。乾治はどんな事が此の納屋の中に行はれて居るのか薄々判つたやうな気がした。(中略)(浅公は)呼吸が獣のやうに暴くなつた頭の大きな子供が今、凍つたやうに眼をひきつらせて何かの怪物の如く節穴を覗いて居る、此の凄絶な光景を眼のあたりに見下ろして、笑ふどころでは無かつた。(無間奈落:138-139)

29) 「私はこの初代との事件は、みよに対する甘い空想の中での戀着事件とかなり密接な関係があるように思う。初代は芸妓としてその清純が他の者によっていつ汚されてしまうかわからぬやうな虐げられた人間であつた。彼はこれを救おうとして結婚したのである。みよも他の下男との失敗から遂に彼の前から姿を消してしまつた。」(懸田克躬「破滅型作家の精神病理」山口祥史(1994)前掲書(第2巻), pp.160-161)

30) 渡部芳紀「太宰治-作家の性意識」山内祥史(編)(1994)『太宰治論集 作家論篇 第5巻』ゆまに書房, p.298

31) 「『無間奈落』は、自己の家を告発するかたちで書かれた半自伝的作品であるが、相馬氏によれば、太宰の父源右衛門が『東京や弘前に妾を囲っていたことは、殆どが知つて』いたという」(渡部芳紀「太宰治-作家の性意識」山内祥史(1994) 前掲書(第5巻), p.298)

太宰を描いていると思われる少年乾治は、生まれて初めて大人の性行為を目撃する。しかもそれは自らの意志によったのではなく、いわば強制的に見させられたのであった。少年の驚きと衝撃は予想以上のものであった。少年はそれを見たが故に一生涯性に対して苦しむこととなった。それはある意味で少年自身が犯されたに等しい。³²⁾ このように主人公が衝撃を受ける場面は『人間失格』にも生々しく描かれている。

階段の途中で堀木は立ち止り、「見ろ!」と小声で言って指差します。(中略)二匹の動物がいました。自分は、ぐらぐら目まいしながら、これもまた人間の姿だ、これもまた人間の姿だ、おどろく事は無い、など劇しい呼吸と共に胸の中で呟き、ヨシ子を助ける事も忘れ、階段に立ちつくしてしまいました。堀木は、大きい咳ばらいをしました。(中略)そのとき自分を襲った感情は、怒りでも無く、嫌悪でも無く、また、悲しみでも無く、もの凄まじい恐怖でした。

(人間失格:123-124)

この文章の内容は『無間奈落』における上の文章の内容と同一である。ここでも主人公は、自らの意志によるのではなく、人の指図で偶然、ある現場を目撃したことを暴露している。しかもそれが主人公の心に一生涯残るほどの衝撃を与えたことがわかる。これらの犯された女性たちがトキを描いているかどうかはわからないが、太宰がおさだやみよやヨシ子を通して同じ情況を描いていることは確かである。³³⁾

これらのことから幼少時の太宰のこのような経験が太宰の心に決定的な心的外傷を与えたであろうことがわかる。『無間奈落』や『思ひ出』から見れば、それは無学で無知な女中の純潔の蹂躪であり、『人間失格』から見れば、それは無垢で可憐な妻の貞操の蹂躪である。いずれにしても「純真で無垢」な女性の性が卑劣な男によって犯され、汚されたことを表わしている。

このように喪失したトキへの太宰の思いは、しかし少女初代との出会いを通して蘇ったと言える。少年時代に太宰がトキと思い切り遊んだように太宰は初代と思い切り遊んだ。しかし、初代との結婚後に知らされた初代の過去は、太宰にトキへの蹂躪を思い起こさ

32) 「太宰治における愛エロスとは、どうやら己の内なる傷みの確認から出発するものようである」(笠原伸夫「太宰治における死とエロス」 山内祥史(編)(1994)『太宰治論集 作家論篇 第6巻』ゆまに書房, p.14)

33) 「『人間失格』は『思ひ出』以上に作者の体験をデフォルメしていると考えられるが、それぞれ作者の幼時をふまえている作品で、しかも共通したようなことを描いているのはまちがいない。『無間奈落』においても、その様子を具体的に描写している」(渡辺芳紀「太宰治 -作家の性意識-」山内祥史(1994) 前掲書(第5巻), p.299)

せ、トキの喪失に対する衝撃を再び蘇らせた。すなわち、初代の処女性の喪失は太宰の心情を再び蹂躪した。太宰にとって初代の処女性の喪失は、トキの性の蹂躪の反復であるのみならず、トキの喪失の反復でもある。それはかつて太宰がトキを失ったように初代をも失うことを意味するからである。

太宰は初代の過去を知って遺書として書き始めた『思ひ出』を執筆し始めてからだんだん麻薬中毒となり、入院にまで至る。そして初代との自殺未遂に至るが、これは彼の「思い出」の終りを意味する。太宰はここでトキとの初恋以来の一つの人生を終えたと言うことができる。初代は太宰にとってトキの投射であるとともに失なわれた初恋の実現という彼の願いを担った存在だったと言えるからである。

兵藤正之助は『人間失格』の中で、太宰は『恥の多い生涯を送った』という、その『恥』の中の、最も恥ずかしかったことについて、少しもふれていない³⁴⁾と言った。しかし、太宰にとって最も恥ずかしかったこととは、『無間奈落』や『思ひ出』、そして『人間失格』で繰り返し書かれているように無垢だったものが汚されたことであろう。しかし、それは『無間奈落』のおさだや『思ひ出』のみよや『人間失格』のヨシ子のことを言う前に『無間奈落』や『人間失格』に詳細に書かれているように、まず太宰自身が精神的に「汚された」ことだったと言うことができる。³⁵⁾

彼が六七歳の頃から、もう女中や下男から淫らな露骨な性教育を受けて居た。

(無間奈落:132)

その頃、既に自分は、女中や下男から、哀しい事を教えられ、犯されていました。幼少の者に対して、そのような事を行うのは、人間の行い得る犯罪の中で最も醜悪で下等で、残酷な犯罪だと、自分はいまでは思っています。

(人間失格:25)

幼年期に下男のいたずらで性の現場を覗き見させられたことや女中の性的いたずらを通してあまりにも性急に訪れた少年太宰の性の目覚めは、もともと鋭敏な性格であった太宰の性格を決定づける結果になったと言える。それは性そのものに対する矛盾した欲望と葛藤である。すなわち、純潔で美しいものであるはずの性への欲望とそれが汚され、汚れた

34) 兵藤正之助『『人間失格』』『一冊の講座』編集部(1983) 前掲書, p.136

35) 「これら三作品(思ひ出、無間奈落、人間失格)に共通して描かれた同類の幼児体験は、必ずしも事実をふまえたものではなく、作家の虚構であるかもしれない。ただそこには作者の意識のなかにそうした虚構あるいは妄想を生み出させたところのなにかが現実にあったかもしれない」(渡辺芳紀「太宰治作家の性意識」山内祥史(1994) 前掲書(第5巻), p.299)

ものとして嫌い憎むという性質である。その時以来、太宰にとって性は美と汚れを同伴した葛藤の産物として彼の心を支配するようになったと言える。それは「凄まじい恐怖」の記憶を蘇らせるものともなったと言える。これは年頃になって自然に性に目覚める前に犯された結果であると言ってよい。

汚れでもって始まった彼の性は、それ以後、無垢を求めてさ迷うこととなる。それがトキに象徴される処女との初恋だったと言える。しかし、それがまた現実に犯され、汚されることで太宰は生の意義を失うのである。女中が汚されたことに対する心の傷を回復させようとしたのが、処女であったはずの芸妓初代との結婚である。太宰は初代を「無垢のままに救った」と信じていた。初代が処女を「守りとおす事」ができたと信じていたからである。太宰は初代をその道から救いだし、初代を清い妻とすることで彼の心の傷は癒されると思ったのであろう。それは太宰自身の汚れをも清めてくれたに違いない。しかし、初代が処女でなかったことを知り、太宰の回復の道は閉ざされる。そのみならずその後の初代のさらなる過ちにより、太宰は完全に打ちのめされることになったとみることができる。

すでに述べたように「汚された」のは、おさだやみやヨシ子を通して描かれたと思われるトキやトキの代償として愛そうとした初代である前に太宰自身であった。少年太宰が初めて性を知ったのは、下男に連れられて男女の逢引の現場を覗き見ることになった時であり、下男下女を通してあまりにも早い少年時代に彼は、歪んだ性欲というものに接することとなり、言わば無理やり性に目覚めることとなったのである。³⁶⁾ それは無垢なものが無理やり犯されて性を知るようになる強姦と同じことであり、一生涯性に対する葛藤を引き起こさせることになったと言える。³⁷⁾ 太宰の心の痛みは次の如く語られている。

すべてに自信を失い、いよいよ、ひとを底知れず疑い、この世の営みに対する一さいの期待、よろこび、共鳴などから永遠にはなれるようになりました。実に、それは自分の生涯に於いて、決定的な事件でした。自分は、まっこうから眉間を割られ、そうしてそれ以来その傷は、どんな人間にでも接近する毎に痛むのでした。
(人間失格:124)

- 36) 「児童の性虐待の被害者たちは深い羞恥心と罪責感に悩まされ、混乱した秘密を心の中に隠しながら生きていかなければならなくなる。思春期以前の時期に破壊的な衝撃が加えられた場合、人間心理に最も大きい影響を与え、精神異常の分裂症状をまねくこともある」(정국(2012)『섹슈얼 트라우마』블루닷, p.8, pp.297-298) 本文に出てくる韓国語文献の日本語訳はみな筆者によるものである。
- 37) 「外傷は自己(self)と有能感や熟達感(capacity for mastery)を損傷させる。最も直接的に羞恥心を誘発するのは虐待である。虐待は個人の品位を損傷させ、虐待の被害者が羞恥心を感じる行為をした後に屈辱感を感じる場合にはもっと悪いものになる。故意的に威脅したり、屈辱感を与えるなどの心理的な虐待は自身に対する最も直接的な攻撃であり、最も羞恥心を起こさせる」(Jon G. Allen Ph.D. 권정혜 외(역)(2013)『트라우마의 치유』학지사, p.123)

これは『人間失格』でヨシ子が犯された時の主人公の感慨として書かれているが、実はこの心の「傷」は太宰の少年時代以来のものだと言えることができる。疑うことを知らない無垢で無知なものが犯されるということは、少女の場合のみならず幼少期の太宰においても同様だったからである。

自分が下男下女たちの憎むべきあの犯罪をさえ、誰にも訴えなかった(中略)その、誰にも訴えない、自分の孤独の匂いが、多くの女性に、依って嗅ぎ当てられ、後年さまざま、自分がつけ込まれる誘因の一つになったような気もするのです。(人間失格:25)

この一節は、あたかも太宰の生涯を一言で言い表しているかのようである。人間の性を犯すという「憎むべきあの犯罪」によって始まった太宰の人生は、その後もその心の外傷が癒されることなく、むしろ外傷の反復として現れた。すなわち、少年が性的虐待によって受けた心の傷は初恋の少女の性的蹂躪によってより大きな心の傷となり、それはその後、初代の過ちに対する心の傷として、太宰の生涯をますます苦痛でやりきれないものにしたに違いない。性の蹂躪は常に信頼の裏切りを伴っていた。純潔が汚されたということは「信頼が汚された」つまり、信頼が破壊されたことを意味していた。以上のことから太宰が両親の愛を受けずに育ち、母親の愛に飢えていたことも事実であろうが、それ以上に太宰が幼少時代に経験した性に対する心の外傷体験が初代を始めとする彼の複雑な女性関係にもっと大きな影響を与えているものと思える。

5. 結論

以上のように『東京八景』のHや『陰火』の妻は初代を描いたものであるが、『思ひ出』のみよ、『無間奈落』のおさだ、そして『人間失格』のヨシ子はトキを描いたものであることを明らかにした。これらの作品においてトキが無垢と純真の象徴的存在として描かれているのに対し、初代はその対照的存在として描かれている。トキと初代は境遇や年齢は類似しているが、太宰が重要視してきたはずの「かねてあこがれの無垢」という点においては全く別の存在であったことがわかる。それにもかかわらず太宰が初代に執着してきた理由は何か。問題は太宰にとって初代が何だったのかということである。

初代の過去に対する衝撃が『思ひ出』執筆の動機になっているが、『思ひ出』のみよはトキ

を描いたものである。同様に太宰の入院中に初代が過ちを犯した後に書かれた『人間失格』でヨシ子が犯される場面は一見初代を描いているかのように見えるが、これはトキを描いたものである。これらの事実から太宰は初代に対して衝撃を受けるたびにトキのことを回想しているということがわかる。このことから初代は太宰にとってトキの投射であり、喪失した少女への恋を実現しようとした存在であったとすることができる。しかし、意外にもトキの代償としての初代は太宰にトキの性的蹂躪の記憶を反復して思い出させることとなり、それは太宰の心の外傷をより大きなものにし、太宰の心情を再び蹂躪する結果となった。

太宰の心の蹂躪は実は太宰の少年期に始まっていた。下人たちが幼い主人に悪質な性的いたづらをしたのであるが、この児童だった太宰に対する性的虐待がその後の太宰の愛に対する葛藤を生んでいるように思える。彼は一生、汚れたものを憎み、女性の無垢と純真を求めたのであるが、いつもそこには純潔を蹂躪するものが姿を現わす。彼の心の傷つきは愛する女性の純潔が汚されたことにあつたのであるが、実はそれは彼自らの純潔の蹂躪に対する心の傷に起因していると言える。すなわち、彼が純潔を求めながらも純潔が犯されうる女性と関係しようとするのは、太宰の少年期における性的虐待に対する心の傷つきが、彼の心の深層に存在していたからだと言することができる。彼の心は純潔の蹂躪の現場から離れることができないでいたからである。それゆえ、彼が汚される運命にある女性に純潔を求め、それを慕い、かつ苦しむという矛盾を繰り返すのである。この愛に対する太宰の葛藤は、彼自身の汚れに対する悶えとその苦しみからの脱出のためであったと言することができる。これが太宰の「初代への異常な執着」の理由であったと言することができる。

【参考文献】

- 정국(2012)『섹슈얼 트라우마』블루닷
 Jon G. Allen Ph.D. 권정혜 외(역)(2013)『트라우마의 치유』학지사
 『一冊の講座』編集部(1983)『太宰治』有精堂
 太宰治 外(1986)『昭和文学全集 第5巻』小学館
 _____(1989)『太宰治全集 第一巻』筑摩書房
 _____(1991)『太宰治全集 第十二巻』筑摩書房
 _____(2001)『人間失格』角川書店
 日本文学研究資料刊行会(編)(1970)『太宰治』有精堂
 _____(編)(1985)『太宰治Ⅱ』有精堂
 文学批評の会(編)(1972)『批評と研究 太宰治』芳賀書房

山口祥史(編)(1994)『太宰治論集 作家論 第2巻』ゆまに書房
_____(編)(1994)『太宰治論集 作家論篇 第5巻』ゆまに書房
_____(編)(1994)『太宰治論集 作家論篇 第6巻』ゆまに書房
_____(編)(1994)『太宰治論集 作家論 第8巻』ゆまに書房

논문투고일 : 2015년 12월 10일
심사개시일 : 2015년 12월 20일
1차 수정일 : 2016년 01월 08일
2차 수정일 : 2016년 01월 14일
게재확정일 : 2016년 01월 19일

 <要旨>

太宰文学からみた性的虐待と心傷

初代は太宰にとって初恋の少女トキの投射であり、喪失したトキへの恋を取り戻すための希望の女性であった。しかし、初代は太宰にトキの性的蹂躪の記憶を反復して思い出させることとなり、それは太宰の心の傷をより大きなものにし、太宰の心情を再び蹂躪する結果となった。彼は汚れたものを憎み、処女の無垢と純真を求めたが、いつもそこには純潔を蹂躪するものが姿を現わす。彼の心の傷は愛する女性の純潔が汚されたことによるように見えるのであるが、実はその傷は自らの純潔の蹂躪に対する傷つきとして彼の心の深層に存在していたことがわかる。太宰において性の蹂躪は太宰が少年期に下人たちが幼い主人にいたずらをしたことで始まり、このことが太宰の愛に対する葛藤を生んでいる。彼が汚される運命にあるものに純潔を求め、それを慕い、かつ苦しむという矛盾を繰り返すのは彼自身の汚れに対する悶えとそれからの脱出のためであったとすることができる。

The Sexual Ill-treatment on the Literature of Dazai

The motif of sexual insult for virgin are repeated in the literature of Dazai. It is written that his first lover, pure girl was insulted by an adult and she has disappeared in front of him in his literature. We can see that Dazai has searched for pureness and virgin to recover from his passed sudden memory in his life.

He was married to Hatuyo who was the beginner of geisha and he believed that he had helped her out of the insults of men as virgin but he has hurted to know that she was not virgin. In this way we can see that Dazai's spiritual complication was caused by the shock of dirt of virgin.

But in this study we found another more deep reason. Namely in his childhood Dazai experienced the sexual bad play by adults who were serving in his house but too much early awakening for sex made him spiritually trouble. After the sexual ill-treatment he came to struggle for love searching for pureness.